7 月 2 日討論要旨（中国ロックに見るワールドインパクト）

林礼釗（STA）

Guiding Question：中国は、文化大革命の後、クラシック音楽やジャズのような欧米音楽の禁止という頚木から解き放たれて、積極的に海外の音楽を取り入れようとした。その過程においては、精神汚染批判のようなアレルギー現象も生じたが、鎖国状況のなかで立ち遅れた文化の進展を、海外の文化を積極的に取り込むことによって、補おうとした。しかし近代以降、中国は外来の文化をありのままに受け入れてはこなかったのではないか。伝統文化と西欧近代文化との衝突があって、精神は中国、 技法は西洋といったような中体西用的な姿勢が 19 世紀の洋務運動で見られ、それ以降も外来文化を「中国的＊＊」のように、中国流に改造して受け入れてきたのではなかったか。果して中国ロックは、中国化されたロックなのか、ロックの衣装をまとった別ものなのか。

討論では、問題について主に以下の意見が提起された。

1. まず、ロックの定義がよく分からない。形式上、それは中国化されたロックだが、ロックの精神である思想性・反逆性は次第に失われ、または外的圧力によって自由に表現できなくなっている。中国ロックは形ではロックだが、精神面では外的圧力によって作られた新しいものだと考える。
2. 中国化されたロックだと思う。文化大革命の後、ロックは「中国」という名を付けないと、排除されることになる。ロックには自分の考えを表出し、政府を批判する部分があるからだ。また、当時は「思想解放」の時代であったが、自由の意識がやはり不足していた。ロックについて言えば、自分の精神に従うのなら、それが真のロックだと考える。
3. まずロックをカテゴリやジャンルで分けることは難しい。また、「外来文化をありのまま受け入れる」こととは何かがよくわからない。現代の西洋ロックはありのままのロックなのかを考える必要がある。ロックには反骨精神があるが、何に反対するのかは状況によって変わる。中国ロックは中国の状況に合わせて作られたロックだと思う。

担当教員の総括：音楽はその時代によって変わっていくものであり、そういう意味ではその時代にその時代のロックがあっていいだろうと考える。アメリカや日本や中国がロックを受容した時期はまさに時代の転換期であった。例えば、アメリカではロックが若者に大きく受容された時代の背景にはベトナム戦争があった。日本の場合は、学生運動や安保闘争といった運動の背景として、海外から取り込まれたロック音楽があった。中国についていえば、文化大革命終了後、自由な芸術表現が求められている中でロックが中国の人たちのこころを掴んだのである。そして、天安門事件が一つ重要な転換点である。六四事件の直前に、崔健は天安門広場の前でデモをやっている学生たちのためにコンサートをやった。その時のロックの雰囲気はきわめて典型的なロックのあり方であった。それが一つのピークとなり、中国でロック音楽が広く認知されたのがその後であった。それから、1990 年代から 2000 年代には、彼らのロック音楽は迷走していった。迷走の一番のポイントは商業化とのせめぎ合いであった。当時では、海賊版の事情によって、ミュージシャンは CD を出すことに対して積極的ではなかった。ライブをやることが彼らがお金を稼ぐ主要な方法となっていた。しかし、その道も行き詰まることとなった。海外進出がその一つの解決案としてあるが、彼らは「国内志向」を堅持していた。しかし、彼らが最近出したアルバムはあまり売れず、彼らのロックには何かがなくなっている感じがする。これは彼ら自身の悩みでもあり、自身に課される課題でもある。